

医療ルネサンス

No.7242

意思決定

「思い」を支える

5/6

患者である前に生活者

押富俊恵さん(38)は、24時間人工呼吸器をつけている。三つのステーションと契約し、毎日2回、訪問看護師が来る。たんの吸引や体調管理、点滴、排せつなどのケアなしには今の暮らしが成り立たない。

昨春秋、愛知県の自宅マシオンで、一つのステーションの女性管理者と、少し後味の悪いやりとりをした。

女性は、訪問範囲の変更により、別のステーションに替わることになるよ伝えにきた。引き継ぎをする日程も決めていた。何度も強頼しをの、押富さんに対して「質の高いケア」を提供することだ。

ありがたい言葉だと思いつつ、なぜだかモヤッとした。理由をあれこれ考えて、変更の際し、何ひとつ自分の要望を聞かれなかったからだと思に至った。

24歳で発病し、30歳の時、病院でなく自宅で生きると決めた。在宅医や訪問看護師、ヘルパーたちと新しい関係を築いてきた。

作業療法士時代の同僚たちに誘われ、車いすで近くのコンビニまで外出する余裕ができたのは、さらに数年後だ。店内を巡り、マスクカット味のアメを買った。やがて、活動の場は講演や

地域活動へと広がった。人から必要とされる時、自分の存在価値を感じる。

小さいな意思疎通。日々は、小さな「仕方ない」と「まあ、いつか」の積み重ねだ。自尊心が傷ついたり、遠慮や気遣いに疲れたり、頑張ろうと意気込んだり。



在宅医の服部さん(左)の診察を受ける押富さん(愛知県尾張旭市)＝尾賀聡撮影

ステーション選びで最優先にしたいのは、「やりたいうことを実現する応援をしてくれる」こと。質の高いケアを真っ先に求めたら、体調の悪化や入院のきっかけになるイベントの開催や夜の外出なども反対されるだろう。優先すべきは、誰の価値観？

在宅医の服部努さん(54)が訪問に来た。肺炎が心配になれば、毎日やってきて、抗生剤の点滴をする。非常時は、1日に数十回メールを交わすこともある。時に、入院するタイミングを巡って押富さんと意見がぶつかる。服部さんは、医療的な判断を一方的に押しつけず、待てる限り、待つ。

訪問看護師の小泉洋子さん(55)も「ケアのまん中に本人がいて、意思や価値観が尊重されていることが基本」と言う。あうんの呼吸が通じる一人だ。

私を理解してくれる人がいて連携してくれるから、暮らしがこんなに楽しいのだと、押富さんは思う。

55. 読売新聞東京本社医療部 FAX03(3217)1960 iryou@yomiuri.comへ

とレンコンのサラダ

熱量 274kcal/塩分 1.6g (1人分)

*材料 2人分
 フキ100g/レンコン100g/ウド10cm/オクラ2本/鶏胸肉100g

1. フキは葉を剥き、水気をよく切ってザルにとり、水気をよく切って酢小さじ2杯をまぶす。
2. ウドは皮を厚めにむき短冊に切り、酢水にさらす。
3. タマネギは薄切りにする。
4. 鶏胸肉は耐熱皿にのせてフォ